のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野 あづみの あるく路

NO.1

千国街道の宿場・保高宿を訪ねる

～塩の道の宿場町と穂高神社と～

「塩の道」とも称される松本と糸魚川を結ぶ千国街道。その松本宿から数えて3番目の宿場がここ、保高(穂高)宿です。

かつては日本海から塩をはじめとする海産物を、内陸からは麻や木綿、木炭などを運ぶ街道の宿として発展。中世、「敵に塩を送る」という言葉の由来となった越後の上杉謙信から甲斐の武田信玄へ日本海の塩が送られた故事は、まさにこの千国街道を通じて塩が送られたことによると伝えられています。

近代、とくに明治後期以降の穂高は特産品により活況を呈し、養蚕やワサビ栽培の発展とそれを売買する商人たちにより、現在旧道と呼ばれているメインストリートのほか、明科方面へ抜ける狐小路などは料亭や置屋が軒を連ね、松本市からもわざわざ人が訪れるほどの賑わいをみせていました。

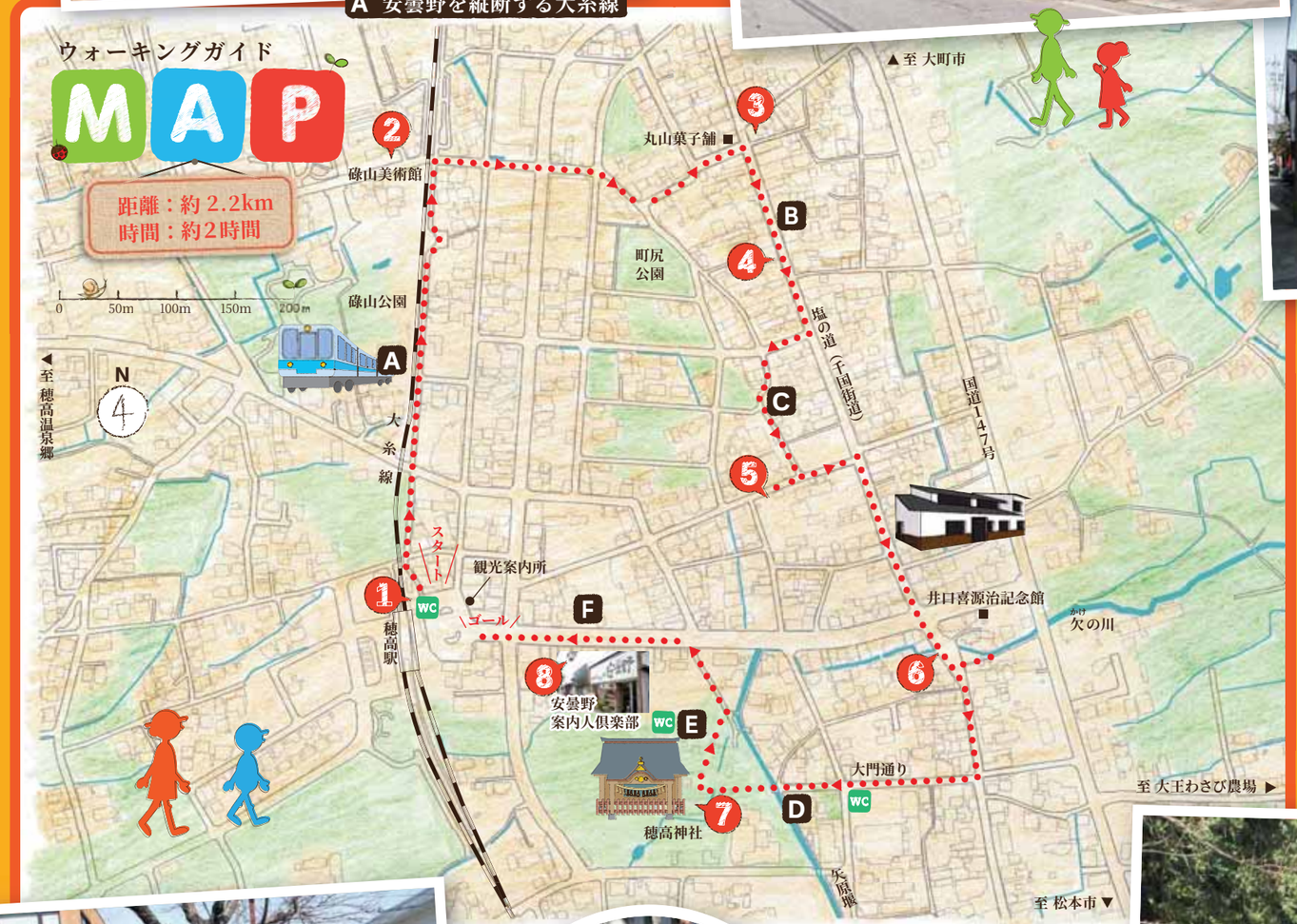
※平成 26 年度・長野県地域発元気づくり支援金を受けて作成されました。
※この地図は「安曇野あるく路」の資料として作成されました。
散策の際は歩きやすい服装を心がけ、車などの往来に十分注意し、各自で責任を持って行動してください。
また住宅敷地内などプライベートな空間への立ち入りは、慎んでください。

編集・発行 安曇野案内人倶楽部
〒399-8303　長野県安曇野市穂高5971−1(クラフトショップ安曇野内)
TEL：0263−88−5563　FAX：0263−88−5565
URL：http://azumino-guide.com　E-mail：info@azumino-guide.com

A 安曇野を縦断する大糸線

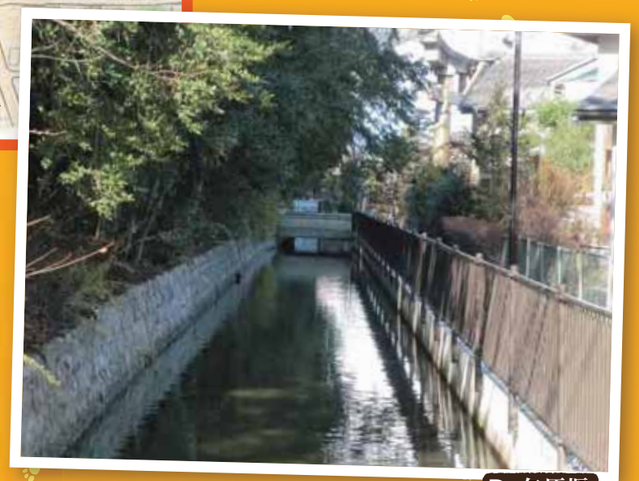
B 旧街道沿いのまちなみ

C 裏路地の懐かしい風景



F 駅前通りにある石造文化財群
左端の道祖神文字碑は明和8年(1771)建立

E 穂高神社若宮社の狛犬
明和6年(1769)建立



D 矢原堰

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野（あづみの）あるく路

NO.1

千国（ちくに）街道の宿場・保高宿（ほたかしゅく）を訪ねる

～塩の道の宿場町と穂高神社と～

1 穂高駅と銀座の柳

大正4年(1915)、「信濃鉄道株式会社」の民間鉄道路線として松本ー信濃大町駅間で開業し、のち昭和12年(1937)に国鉄に移管され現在に至っています。駅舎は穂高神社の最寄り駅であることから社殿を模した木造建築となっていて、市民だけでなく観光で駅に降り立った人にも大変好評です。

また駅前広場にある柳の木は、関東大震災復興記念として昭和7年(1932)に安曇野産の柳が東京へ出荷された後、昭和62年(1987)にも当時の穂高町より100本が再出荷され、その返礼として最初の出荷分の2世の柳が里帰りして植樹されたものです。

2 碌山（ろくざん）美術館

※観覧料：大人700円、高校生300円、小中学生150円

昭和 33 年（1958）開館。「東洋のロダン」とも称される彫刻家・荻原碌山の個人美術館。併設されている展示棟では碌山に縁のある高村光太郎など他作家の作品も展示されています。蔦の絡まるレンガ造りの、西欧キリスト教会を思わせる本館＝碌山館は多くの人々の奉仕と浄財によって建設され、隣接する穂高中学校（現、穂高東中学校）の生徒も工事のレンガ運びなどを手伝ったそうです。建物はその特徴的な外観からテレビドラマなどでは“教会”としてロケ撮影が行われたこともありました。（碌山館：国登録有形文化財）

※「安曇野あるく路」のガイドツアーでは入館しません。

3 北の枡形（ますがた）

中世に誕生した保高宿は外敵の侵入を防ぐ目的から宿場の入口が枡形（鍵の手）のように屈折していました。街道北側入口の枡形には明治42年（1909）創業の老舗和菓子屋の丸山菓子舗があり、角に立つ松の木や付近に鎮座する道祖神などが往時の様子を偲ばせています。

4 旧若松屋

現在雑貨店が営業している建物は、明治初期の自由民権運動家・松沢求策の生家です。土蔵造りを発展させた見世蔵建築は一般の民家建築に比べて防火性能に優れており、窓の扉の召し合わせ（重なる部分）が段形で密閉性を高める構造となっているところにもその一端を見ることができます。

5 火の見やぐら

踊り場に小屋を付属する珍しいデザインの大型の火の見やぐらは、もとは昭和30年代に黒部ダム建設工事施設の骨材砕石場において監視塔として使われていたものを、ダム完成後の昭和42年（1967）に穂高町が譲り受け、火の見やぐらとして再生活用したものです。昭和の一大国家的プロジェクトであった黒部ダムの建設当時の遺構が場所を変え、いま穂高のまちなかで静かに佇んでいます。

6 南の枡形（ますがた）

街道南側入口となる枡形は、現在の駅前通りと旧街道との交差点南のあたりにあり、ちょうど矢原堰が横断していた為に木橋がかけられていたそうです。また保高宿には番所があったことも知られており、場所は定かではないですがこの南の枡形にあったであろうと推測されています。

枡形の傍らには民衆信仰の十王堂や大型の青面金剛像・二十三夜塔があります。

（十王堂は個人所有の為、内部非公開）

7 穂高神社

日本アルプス総鎮守の神様として名高い同社は、本宮（里宮）はここ安曇野市穂高、奥宮は上高地の明神池畔、嶺宮は奥穂高岳の山頂に、それぞれ鎮まっています。御祭神の穂高見神と綿津見神は海人族である安曇族の祖神とされる海神で、この地に定着した安曇族と穂高神社の密接な関係を示しています。正確な創建年は不明ですが、平安時代延喜式神名帳に「名神大社」として記載があり、古代からの全国的な大社であることが分かります。

●本殿

20年に1度の大遷宮で本殿の新たな造営が執り行われ、その間に2度の小遷宮が行われます。新たに造営されるのは常に中殿（穂高見神）となり、また本殿の鰹木は他に例を見ない特徴のある形式となっていて、穂高造と呼称されています。

●御祭神

中殿：穂高見神（ほたかみのかみ）
左殿：綿津見神（わたつみのかみ）
右殿：瓊瓊杵神（ににぎのかみ）
別宮：天照大御神（あまてらすおおみかみ）

●大鳥居

大きな両部鳥居。建立年不明ですが、明治 22 年（1889）の大遷宮祭に発生した境内の大火事で受けた焼け跡が南側の柱上部に残っており、少なくともそれ以前の建立であることが推察できます。

●お船祭り　※長野県無形民俗文化財

毎年9月26～27日に行われる例大祭の御船神事（通称「お船祭り」）は、大きな舟形の山車をぶつけあう勇壮なお祭りです。（お舟の引廻しは27日のみ。）

9月27日は安曇族の祖である安曇比羅夫（あずみひらふ）が天智2年（663）の白村江（はくすきのえ）の戦いで戦死した日と伝えられ、山車が舟形なのは海人族としての記憶が現代に生きている証しと語られています。

祭りの様子は神社資料館「御船会館」にて詳しく紹介されています。

8 クラフトショップ安曇野（あずみの）（安曇野案内人倶楽部）

駅前通り沿いにあるお店は安曇野を中心とする工芸作家の作品が並び、木工・ガラス・皮・織物など多彩でユニークな作品を販売しています。隣接するコーナーには安曇野案内人倶楽部の運営するカフェコーナーがあり、観光資料も充実。まちなか散策の小休止スポットとして、また列車やバス出発までの時間待ちなどにたいへん好評です。

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野 あづみの あるく路

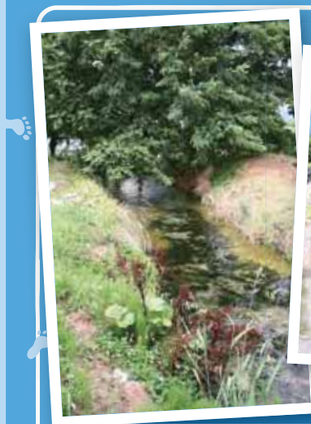
NO.2

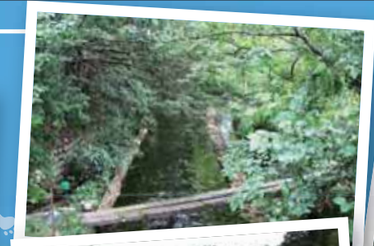
安曇野わさびを育む 湧水の里を訪ねる

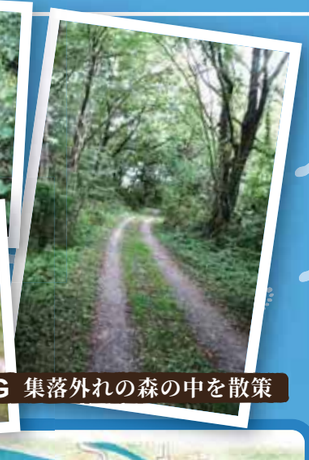
～本陣等々力家と清らかな水の流れ～

千国街道保高宿から見て東側に位置する等々力地区。穂高駅からのんびり歩いて20分ほどで、集落の中心にある本陣等々力家に到着します。屋敷を構えた等々力氏は、江戸時代に庄屋を務めた家柄。古代よりこの地に定住して中世には在郷武士として戦にも出陣していたようで、備えとしての等々力城を現在の屋敷からほど近い場所に築いていました。

等々力地区は複合扇状地となっている安曇野の中では標高の低い扇端部に位置するため、地面を掘り下げればこんこんと水が湧き出す恵まれた地形なのです。その冷たく清らかな水を利用したわさび栽培やニジマスの養殖などが盛んです。わさび田や稲田の広がる背景には北アルプスを望むことができ、安曇野らしい風景の中を、ゆったり気分でウォーキングできるエリアとなっています。


H 水草が揺れる湧水路




G 集落外れの森の中を散策

F わさびの露地栽培

E 小粒な道祖神文字碑

D 水路脇の親水スペース

I 道標 大正 13 年 (1924) 設置

A 本陣等々力家前、寒冷紗に守られるわさび田

B 盛夏の田園風景と北アルプス

C 景観に配慮したデザインのゴミステーション

※平成 26 年度・長野県地域発元気づくり支援金を受けて作成されました。
※この地図は「安曇野あるく路」の資料として作成されました。
散策の際は歩きやすい服装を心がけ、車などの往来に十分注意し、各自で責任を持って行動してください。
また住宅敷地内などプライベートな空間への立ち入りは、慎んでください。

編集・発行 安曇野案内人倶楽部
〒399-8303 長野県安曇野市穂高5971−1(クラフトショップ安曇野内)
TEL：0263−88−5563 FAX：0263−88−5565
URL：http://azumino-guide.com E-mail：info@azumino-guide.com

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野（あづみの）あるく路

NO.2

安曇野わさびを育む 湧水の里を訪ねる

～本陣等々力（とどりき）家と清らかな水の流れ～

1 本陣等々力家 ※入場料：大人300円

江戸時代、庄屋を務めていた等々力氏の屋敷。本陣といっても参勤交代などの大名宿泊所という意味ではなく、かつてこの付近が松本藩主の鮭や鴨の狩猟場であり、その際に藩主の休息所として利用されていたことから名付けられたものです。長屋門は江戸中期の作とされ、市の有形文化財指定。庭園も同じく江戸中期の作ですが桃山期の流れをくむ様式とされ、殿様座敷など四部屋続きの主屋から市天然記念物のビャクシンをはじめ素晴らしい庭の様子を鑑賞できます。

太鼓橋

この屋敷は平成23年(2011)放送のNHK連続テレビ小説「おひさま」のロケに使用され、主屋と土蔵を繋ぐ太鼓橋がドラマのワンシーンで登場しました。

長屋門入口柱の刀傷

長屋門の外から向かって左側の柱に、江戸後期に発生した一揆の際につけられたという刀傷が残されています。

道祖神とさまざまな石碑

安曇野の代名詞的存在でもある道祖神は、集落入口などにあります。村外から疫病神が立ち入ってこないよう塞ぐ「塞の神」の役割のほか、子孫繁栄・縁結びや無病息災・五穀豊穣など様々な願いや祈りが込められていて、その数は安曇野全域で500体とも600体ともいわれています。

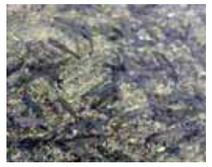
文字碑も多いですが、浮き彫りの像の場合、通常は男女神の双体像です。二神が手を握り合う「握手像」、酒器を手にする酒器像（祝言像）、両手を合わせた合掌像など、そのデザインはさまざま。像の廻りも神殿や松竹梅、菊花弁などが彫られていたり、なかには鮮やかに彩色されたものもあります。

道祖神以外にも二十三夜塔・庚申塔（青面金剛像）・大黒天・馬頭観音など、さまざまな祈りが込められた石仏・石碑が建立されており、それらの道祖神と並び建つ様子を、どの集落でも見かけることができます。（上の画像は等々力地区内に点在する道祖神や石碑です。）

2 集落内のわさび田

等々力地区の東エリアは家々の合間にもわさび田が作られています。わさび田は通常の地面より深く掘り下げられた土地に畝を作って苗を植えつけ、湧水を利用して育てています。近年は様々な事情からハウス栽培（右の写真）も盛んに行われています。

3 養魚場



湧水エリアでは清涼な水を利用したニジマスなどの養殖も盛んで、等々力地区でも養魚場で泳ぐ魚たちの姿を目にすることができます。

4 早春賦歌碑とわさび田

♪春は名のみの風の寒さや♪　ではじまる唱歌「早春賦」は、吉丸一昌作詞、中田章作曲で大正2年(1913)に発表。春を代表する曲として長年歌い継がれ、近年では日本の歌百選に選ばれるなど、全国で親しまれています。安曇野・大町地方の早春の情景を歌ったものといわれ、この穂高川堤防のほか、大町市にも歌碑が建てられました。

穂高川堤防沿いのわさび田

堤防に平行するように作られたわさび田では、散策路を利用してわさびの様子を間近に見ることができます。天気がよい日は安曇野のランドマークともいえる常念岳を背景に望むことができ、人気の撮影ポイントとなっています。またこの散策路のあるワサビ田は平成23年(2011)に皇太子殿下が安曇野へお越しになられた際、わさび田の様子を見学された場所でもあります。（写真は3月頃の風景）

安曇野わさび田湧水群

安曇野の大地の特徴は、北アルプスから流れ出る複数の沢によって形成された複合扇状地であること。その扇頂部（扇状地の頂点）で地中に浸透した水が伏流水となり、扇端部（扇状地の標高が低い地域）で湧水として地表に再び出現します。日量約70万tともいわれる豊富な湧水は、年間を通して水温が一定で13℃前後。わさび栽培の適温は12～15℃といわれており、水量の豊富なことと併せて安曇野の湧水は、まさにわさび栽培にとって最適の環境を作り出しているのです。

本コースで巡る等々力地区ほか穂高・豊科地域の湧水エリアは、「安曇野わさび田湧水群」の名称で昭和60年（1985）に環境庁（現・環境省）の名水百選に、平成7年（1995）には国土庁(現・国土交通省)の水の郷百選に選ばれ、新聞の読者アンケート（※）でも人気1位を獲得するなど、その清涼なイメージと口に含んだときの優しい味わいが、安曇野を訪れる人々にとって癒しの存在となっています。（※平成19年5月22日、朝日新聞夕刊紙上にて発表）

5 等々力城址

戦国時代に築かれた砦跡で、築城年は不明ですがこの地一帯を領した等々力氏が築いたものといわれています。現在は城郭を明確に示す構造物はこれといってありません。周囲を水路が巡る虎口と思しき小高い丘の上に祀られた不動明王像と、そこに並び立つ標柱がそれと示すのみです。西側の眺望が開けているため、天気のよい日は常念岳を正面に望めるビューポイントとなっています。

6 道祖神・二十三夜塔

集落の辻に立つ双体像の道祖神は文政2年(1819)建立。隣の二十三夜塔は文政6年(1823)の建立です。

7 吉祥山東光寺

本陣等々力家の斜め向かいにある、巨大な鉄下駄で有名な曹洞宗の寺。この鉄下駄は仁王様の下駄と呼ばれ、山門の仁王に手を合わせて一礼してから願いを込めて鉄下駄を履くと諸願成就するとのことで、観光で訪れた人に人気です。

鉄下駄の手前には文政2年(1819)建立の道祖神をはじめ、二十三夜塔・大黒天・青面金剛像、さらに多数の馬頭観音像が建立されており、境内には珍しい子育て道祖神像が建てられています。

最寄り駅：ＪＲ大糸線穂高駅

駅から本コース集合場所の本陣等々力家前までは1.2km・徒歩約20分の距離です。

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野 あづみの あるく路

NO.3

物流街道の宿場町
豊科・成相新田を訪ねる

～町の誕生は江戸時代の都市計画！？～

安曇野市の中心エリアである豊科の成相新田地区は、中世に甲斐武田氏の拠点として館が築かれるなど交通の要所として存在していました。小集落と呼べる規模の開発はありましたが、本格的に町として発展を始めたのは江戸時代初期に松本藩が物流街道の千国街道で、伝馬宿を整備したことによるとされています。

近代以降も南安曇郡の郡役所が置かれるなど、地域社会の中心地として発展。昭和以降は大規模な工場誘致を行い近代産業都市へと変化し、街道周辺の飲食店街も大いに繁盛するなど、農村集落主体の安曇野にあって異色の存在となりました。近年は市街地の空洞化が課題になっていますが、近世から近代までの町の歴史が随所に見られ、裏路地も含めたちょっとディープな安曇野のまち歩きを楽しめます。

※平成 26 年度・長野県地域発元気づくり支援金を受けて作成されました。
※この地図は「安曇野あるく路」の資料として作成されました。
散策の際は歩きやすい服装を心がけ、車などの往来に十分注意し、各自で責任を持って行動してください。
また住宅敷地内などプライベートな空間への立ち入りは、慎んでください。

編集・発行 安曇野案内人倶楽部
〒399-8303　長野県安曇野市穂高5971−1(クラフトショップ安曇野内)
TEL：0263−88−5563　FAX：0263−88−5565
URL：http://azumino-guide.com　E-mail：info@azumino-guide.com

A 旧市川歯科 大正時代建築の近代遺産

B 街道に残る個性的な装飾看板

C 火の見やぐらと１月の風物詩「御柱（おんばしら）」

F 旧豊科劇場
戦前～戦後に賑わった劇場・映画館

E 豊科学校跡
街道の合流点に設置された明治期の学校

H 開道記念碑 大正４年１月５日開道

G 豊科醤油 地元でおなじみの醤油醸造店

D 成相追分 旧街道の分岐点

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野（あづみの）あるく路

NO.3

物流街道の宿場町
豊科（とよしな）・成相新田（なりあいしんでん）を訪ねる

～町の誕生は江戸時代の都市計画！？～

1 豊科駅

大正4年（1915）1月6日開業で、穂高駅と並ぶ安曇野市の中心駅。ハーフティンバーを活かしたスイスの山小屋風デザインが好評です。

● 二宮金次郎像

駅舎の脇にある二宮金次郎の石像。昭和初期、当時駅長だった五十嵐金次郎が自身の名前を誇りとして建立したものです。

2 千国街道・成相新田宿

江戸初期、松本藩の命により領内の交通運輸を整備する一環として誕生した宿場。すでに小集落としてあった南側を成相町村、新たに町割りされた北側の地区を新田町村とし、新田の入植者は松本藩領外からもあったといいます。現在は町のすがたも大きく変わりましたが、通り沿いの町屋や民家の様子は宿場町であった頃の面影を感じさせてくれます。

3 十返舎一九宿泊処の石碑

「東海道中膝栗毛」の作者として有名な江戸後期の作家、十返舎一九。先の本を出版後、文化11年（1814）に信州を訪れた際、ここ成相新田宿にも宿泊。翌日ここから穂高牧の満願寺へ移動していったという記録が残されています。この時の踏査記録を活かしたのが「続膝栗毛」で、文化13年（1816）発刊の第八編「従木曽路善光寺道」にて成相新田宿の様子などが紹介されました。

4 周岳山法蔵寺

浄土宗知恩院の末寺で、創建は永正3年（1506）。もとは別の場所にあり、現在地には当初甲斐武田氏の戦略拠点となる館があったとされています。（安曇野市史跡）
江戸初期の成相新田宿の整備にともない慶長16年（1611）に同地へ寺が移転。明治初年の廃仏毀釈により廃寺となって本堂や庫裏は解体されましたが、無事残った山門や鐘楼門などは貴重な歴史資料として文化財に指定されています。

● 山門

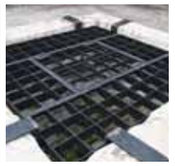
寛政元年（1789）建立。諏訪大社下社春宮の幣拝殿も手がけた名工・伊藤（柴宮）長左衛門の代表作で、大きく特殊な屋根の構造が印象的です。彫刻が多数見られることも特徴で、唐獅子・竜・麒麟など主題は48種にも及ぶとされています。（長野県宝）

● 鐘楼門

山門建立から数年後、同じく伊藤長左衛門の手により建立されました。（国登録有形文化財）

● 古井戸

境内の一角に残る深さ13メートルの巨大な井戸。



● 庫裏

もとは江戸中期頃に堀金岩原にあった安楽寺の庫裏として建てられたものでしたが、廃仏毀釈により明治4年（1871）に穂高町の商家へ移築。さらに明治45年（1912）、この商家より同寺が引き取り庫裏として再利用することとなりました。規模が大きく、当初の形をよく残していることから文化財的価値の高い建物と評価されています。
（国登録有形文化財）

5 安曇野市豊科郷土博物館

旧豊科町時代から続く郷土の歴史資料館。民俗資料を中心にした常設展示コーナーのほか、地元にゆかりのあるテーマの企画展や講座も定期的に開催されています。

※入館料：大人100円、
中学生以下無料

6 八坂神社

明治維新後の社会騒動も一段落し、町では商業を発展させようと初市を興すことが計画されました。しかし、もともと成相は南隣村の本村神社が氏神であるため成相自体の祭神はなく、市を興すことができませんでした。そこで京都祇園の八坂神社の祭神・素戔嗚尊（すさのおのみこと）を勧請。その春祭りとして役所に申請し、認可されたのでした。明治15年（1882）創建（新田地区は氏神として新田神社が別の場所に鎮座しています）。

● あめ市と福俵引き

初市はあめ市と呼ばれています。松本で始まった塩市の名前が飴市に転じ、のちに千国街道の各町に伝わったものとされています。塩市の起源は諸説ありますが、上杉謙信から武田信玄に塩が送られた故事（伝説）を由来とする話が有名です。成相新田のあめ市の特徴は福俵曳きという神事が行われること。正月の伝統神事・御柱に飾られた福俵を地元の若衆が町中を曳き回し、俵を地面に叩きつけて五穀豊穣を祈り、重税に苦しむ農民を象徴する姿を人間やぐらで示します。そして最後は前年に慶事のあった家に出向いて、家人と若衆の間で俵の引き合い合戦を行ったのち無事引き渡しを済ませます。ローカル色豊かで素朴なお祭りですが、奇祭とも呼べる珍しいものなので一見の価値ありです。

7 うろたえ橋界隈

現国道にまだ車の往来が見られなかった時代、街道の真ん中には水路が走り、東西の町屋裏手には呑堰（のみせぎ）が引かれていました。呑堰へ通じる水路が街道を横切る場所に石橋がかけられ人々から「うろたえ橋」と呼ばれていたのですが、これは周辺に軒を連ねる料理屋や置屋で飲みすぎたり支払いが不足してうろたえる人がよく見かけられたことなどから、いつの頃からかそう呼ばれるようになったのだそうです。

● 旧丸屋製菓舗

うろたえ橋のあった交差点に面して、かつて菓子屋だった趣ある建物が残っています。現在はポン菓子「ぽんべえ」が営業しており、昔懐かしいポン菓子の販売をしています。

● 大黒天像

うろたえ橋の橋石を転用して彫られたものと伝わっています。

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野 あづみの あるく路

NO.4

緑ゆたかな集落景観・中萱を訪ねる

～熊野神社と貞享義民の里と～

安曇野市南部の中萱地区。村の誕生は中世にさかのぼり、以来堰（農業用水路）の開削とともに新田が開発され、南安曇地方の農村集落の一角を形成してきました。

江戸時代の貞享3年（1686）、中萱村の農民を中心に発生した農民一揆「貞享騒動」は松本藩史上に残る大事件となり、主導的立場にあった元庄屋・多田加助はじめ多数の一族・同志が処刑される悲劇的結末となりましたが、加助たちの無念の思いは後世に語り継がれ、その行動に対する顕彰が今もなお盛んに行われています。

中萱集落をめぐる本コースでは、貞享義民ゆかりの場所をはじめ、県下最大級の御船が登場する例大祭を行う熊野神社や、安曇野らしい屋敷林と古民家が連なる農村集落のいまを探訪します。

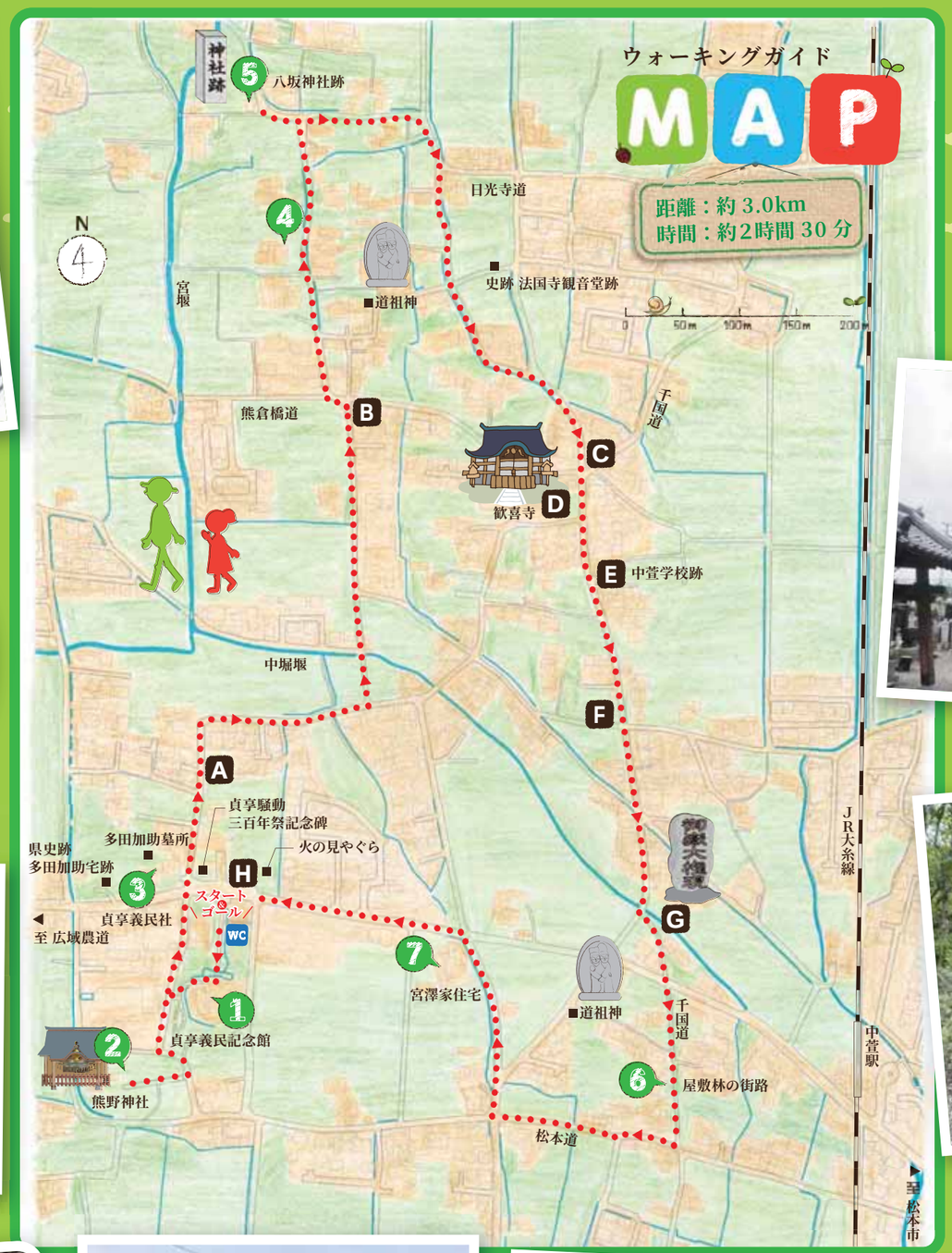
※平成 26 年度・長野県地域発元気づくり支援金を受けて作成されました。
※この地図は「安曇野あるく路」の資料として作成されました。
散策の際は歩きやすい服装を心がけ、車などの往来に十分注意し、各自で責任を持って行動してください。
また住宅敷地内などプライベートな空間への立ち入りは、慎んでください。

編集・発行 安曇野案内人倶楽部
〒399-8303　長野県安曇野市穂高5971−1(クラフトショップ安曇野内)
TEL：0263−88−5563　FAX：0263−88−5565
URL：http://azumino-guide.com　E-mail：info@azumino-guide.com

B 道標 集落の各所に立っています

A 道祖神 天保 12 年（1841）

県史跡多田加助宅跡



C 道祖神 文化 2 年（1805）

D 見石山歓喜寺 腰屋根の装飾に注目

E 中萱学校跡 明治期の学び舎

H 二十三夜塔と道祖神
【中】祝言像、明治14年(1881)【右】握手像、建立年不明

H 火の見やぐら

G 御嶽大権現

F 道祖神

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野 あづみの あるく路

NO.4

緑ゆたかな集落景観・中萱（なかがや）を訪ねる

～熊野神社と貞享義民（ていきょうぎみん）の里と～

1 貞享義民記念館

※入館料：大人300円、中学生以下無料

江戸時代、松本藩内で発生した百姓一揆「貞享騒動」を顕彰する記念館。主導的立場だった中萱村の元庄屋・多田加助の行動をはじめ騒動の経過を分かりやすく解説する立体映像コーナーをはじめ、騒動を含めた当時の農村生活を紹介する展示コーナーなどがあります。

● 貞享騒動

貞享３年（1686)、松本藩内で発生した農民一揆。同年の作柄が不作にもかかわらず、藩は年貢を1俵あたり３斗から３斗５升へ引き上げ決定。周辺諸藩では２斗５升が基準であることに比べ非常に厳しい取立てであり、藩の方針に堪えかねた多田加助ら同志が密議を行い、２斗５升への減免等を求める訴状を提出。計画を聞きつけた藩内各地の農民が呼応したため、決行日には松本城下に1万人にも及ぶ農民が加勢に集まったと言われています。
藩では事態収拾のため、いったんは加助らの訴えを聞き届けたものの、すぐに前言撤回した上に多田加助とその一族、および同志ら合計 28 名を捕縛、磔・獄門などの極刑に処しました。
騒動の後、加助らの訴えた２斗５升への減免は認められませんでしたが、年貢米の取り決めは元通りの３斗へ戻されたのでした。

2 熊野神社

中萱村の産土神で、紀州の熊野新宮より分霊を受けて創建されました。春日造の本殿および境内社の旧八坂社本殿はともに安曇野市有形文化財指定で、それぞれ17世紀中期と後期の建築とされています。貞享騒動発生前、多田加助が同志らと集まって密議を行ったのが同社であると伝わっています。

● 逆さ杉

境内に残る杉の樹幹。慶応2年 (1866) の暴風で倒木しましたが、多田加助の挿した杖が大きくなったものであるという伝説が残り、加助の逆さ杉とも称されています。

● 御祭神

伊弉冊尊（いざなみのみこと）
速玉男命（はやたまおのみこと）
泉津事解男命（よもつことさやおのみこと）
素盞嗚尊（すさのおのみこと）

● 御船祭り

同社の例大祭は毎年８月最終週末に執り行われ、県下最大級（長さ約14m高さ約8m)となる御船が集落内を曳航されます。実り始めた稲穂の揺れる田んぼの間を御船が曳かれる様子は安曇野に秋の訪れを告げる風物詩となっています。
(安曇野市無形民俗文化財)

3 貞享義民社

貞享騒動から50年を経た享保20年(1735)、多田家において加助ら処刑された一族を祀る祠が邸内に建てられ、明治13年(1880)に同志12柱を合祀して二百年祭を行い、現在地に社殿を造営したのが同社の始まりです。当時は加助神社と称しており、昭和35年(1960)に現在の貞享義民社へと変更されました。

● 境内の句碑

拝殿脇に俳人柿本芳月の筆による「二斗五升語り伝えよ稲の波」の句碑があります。

● 多田加助の墓

義民社の北側に隣接してあります。

● 多田加助宅跡

長野県史跡

● 貞享義烈碑

安曇野市有形文化財

4 旧集落のまちなみ

中萱地区のうち、古くは下中萱村と呼ばれた集落の中心地。屋敷林に囲まれた古民家や土蔵、板塀のある家並みの続く集落は安曇野らしい集落景観を楽しめます。また南北に走る道路は集落の入口で鍵の手に折れており、中世のまちづくりの姿を垣間見ることができます。

5 八坂神社跡

下中萱集落の北に八坂神社がありましたが、明治40年（1907）に境内の秋葉社、八王寺社、天満宮とともに熊野神社に合祀されました。現在同地には双体道祖神ほか、庚申塔、二十三夜塔などの石神石碑が建立されています。

6 屋敷林の街路

両脇に屋敷林の緑豊かな街路景観を持つ狭い路地は、かつて安曇野を南北に縦断していた主要道路・千国道のひとつでした。大規模な道路区画整理などが行われなかったため、現在では古い時代の千国道の様子を偲ぶことができる貴重な存在となっています。

7 国登録有形文化財 宮澤家

明治から昭和初期にかけて建築された主屋と付属建物の合計数棟が国登録有形文化財となっています。製糸業で栄えた旧家で、戦前の和風建築住宅の典型として貴重な存在です。
屋敷林を伴う庭の様子も素晴らしいです。(個人宅につき、敷地内への立ち入りはお控え下さい。)

最寄り駅：ＪＲ大糸線中萱駅

熊野神社最寄りの駅として、屋根に神社建築の千木・鰹木を模した装飾が印象的です。
駅舎の傍らには多田加助のレリーフがあります。(彫刻家・小川大系作)
貞享義民記念館前（スタート地点）まで600m、徒歩約10分です。

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野 あづみの あるく路

NO.5

犀川の岸辺、坂と小路の街 明科を訪ねる

～水郷の町並みと歴史の交差点～

安曇野市の北東部、犀川・穂高川・高瀬川の三川合流地点にほど近く、豊かな水の流れを望むことができる岸辺に発展したのが明科の市街地です。近世から近代にかけて犀川を利用した水運「犀川通船」が開通して市街のはずれに船着場が設けられたり、昭和に入っては長野県の水産試験場が設置されるなど、水郷と呼ばれるに相応しい町の様子がうかがえます。

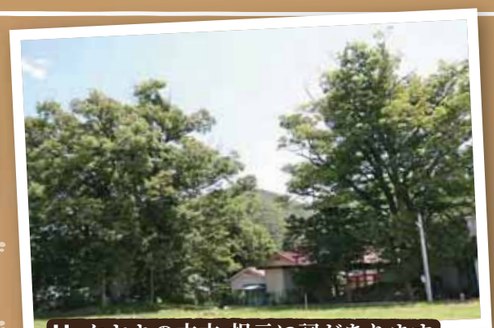
また貴重な考古学的発見として注目される明科廃寺跡が市街地で発掘され、近代には明治後期に篠ノ井線が開通し、南安曇から大北地方にかけての玄関口としても発展。そんな時代の古今を問わず地域の要所として人々を惹きつける街中は坂道や狭い裏路地も多く、山に囲まれた町でありながらもどこか海辺の港町のような風情も漂う、不思議な感覚を味わうことができます。

※平成 26 年度・長野県地域発元気づくり支援金を受けて作成されました。
※この地図は「安曇野あるく路」の資料として作成されました。
散策の際は歩きやすい服装を心がけ、車などの往来に十分注意し、各自で責任を持って行動してください。
また住宅敷地内などプライベートな空間への立ち入りは、慎んでください。

編集・発行 安曇野案内人倶楽部
〒399-8303　長野県安曇野市穂高5971−1(クラフトショップ安曇野内)
TEL：0263−88−5563　FAX：0263−88−5565
URL：http://azumino-guide.com　E-mail：info@azumino-guide.com

F カヌー競技会場

G 念仏供養塔

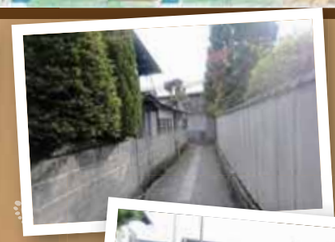

H ケヤキの古木 根元に祠があります

I 明科酒造

E 笹屋 明治 35 年創業の老舗菓子店

D 旧道（川手往還）

C 二十三夜塔・道祖神・庚申塔
道祖神：嘉永 5 年 (1852) 建立



B まちなかの裏路地

A 招魂社

のんびりゆったり
安曇野ぶらぶら
ガイドウォーク

安曇野 あづみの あるく路

NO.5

犀川の岸辺、坂と小路の街 明科を訪ねる

～水郷の町並みと歴史の交差点～

1 明科駅

明治35年（1902）開業。篠ノ井線の駅としては松本平の中で最北にあり、長野方面からやってきた場合の安曇地方の玄関口となる駅です。開業から昭和初期にかけては、安曇野特産のワサビなどを東京方面へ出荷する貨物や買付けの行商人などで大いに賑わったそうです。隣の西条駅に至る区間の潮沢はしばしば土砂崩れなどの災害が発生する難所でしたが、昭和63年(1988)に新線が敷かれ、廃線となった路線は現在ハイキングコースとして一部を整備開放。廃線ウォークとして市民や観光客の人気を集めています。
廃線敷きコースのガイドも承っています。詳しくは安曇野案内人倶楽部へお問い合わせ下さい。

2 平林醸造店

まちなかに残る和風建築の商店は味噌醤油醸造の老舗でした。現在は醸造していませんが、正面の屋根上に掲げられている商店看板が今もなお圧倒的な迫力を見せ続けています。この種類の看板が三連で飾られるのは珍しく、遠く県外から見学に訪れる人もいるそうです。

3 龍門寺

松声山龍門寺は曹洞宗の大町市大沢寺の末寺で、寺伝によれば永正元年(1504)開創とあり、本尊の聖観音坐像は鎌倉時代末から室町時代にかけての作と伝わっています。近世の明科は松本藩領外で、明治初年の松本藩主導の廃仏毀釈による影響を受けずに済んだため、廃仏を恐れて穂高方面から同寺へ持ち込まれた仏像が匿われたこともありました。
また門前には地域文化の足跡を残す石碑などが並ぶほか、明治期の篠ノ井線開通工事に際し発生した事故の犠牲になった工夫の慰霊碑があり、往時の歴史を静かに物語っています。

●弔鍊道工夫死亡者之碑

明治34年(1901)10月建立

4 龍門渕公園

かつて犀川が今より東を流れていた頃、本流をさえぎるように岩が突出して大渦を発生させるなど難所として恐れられていたため、犀川の水霊として龍神「闇龗神（くらおかみのみこと）」を祀り、荒ぶる川を鎮めたのが現在この巨岩の上に鎮座している龍神宮です。日照りの折には雨乞いの祭祀もここで行われたそうです。

5 接吻道祖神

男女神が接吻をしている道祖神。ここから数キロ山の中へ入ったところに同一モデルのオリジナルが在り、この公園に据えられているのはそのレプリカとなります。道祖神のふるさとと呼ばれる安曇野にあっても異色の存在です。

6 犀川

北アルプスの槍ヶ岳が源流の梓川と木曽が源流の奈良井川が松本市内で合流する地点から犀川の名称となり、明科で高瀬川や穂高川と合流したのち、善光寺平で千曲川と交わるまで信濃川の支流として大河を形成しています。かつては松本と善光寺平を結ぶ水運事業「犀川通船」が営まれるなど地域経済の発展に貢献したほか、湖だった松本平を人の住める陸地に変えたという犀龍の話を描いた泉小太郎伝説など、民話の世界にも数多く登場する歴史ある河川です。

7 あやめ公園

隣接する龍門渕公園とともに、初夏にはあやめが一面に咲き誇る公園で、開花のシーズン(6月頃)には毎年あやめ祭りが開催されて多くの人が観賞に訪れるなど、人気を博しています。

8 廣田神社

明科地区の産土神。創建年代は不明ですが、古くより地元住民によって大切に守られてきた神社。御祭神の御饌津命（みけつのみこと）は保食神（うけもちのかみ）＝食物の神様です。

●合社（元・奉安殿）

境内に立つ石造の社殿はかつての奉安殿で、第二次大戦終戦まで地元の国民学校（現・明南小学校）に建立されていたものを、昭和21年(1946)に同社へ移築したものです。現在はもともと境内にあった小祠の神々を祀る合社とされていますが、全国各地にあった奉安殿の大半が解体された中、こうして損壊もなくほぼ原形のままに残されている姿は、戦時資料としても貴重な存在といえます。

※奉安殿
御真影（天皇皇后の写真）と教育勅語を納めていた建物のこと。明治後期から大正期以降、全国の小中学校に向けて御真影が下賜され、昭和になってからは石造やコンクリート造の奉安殿を学校の敷地内に建築。戦前は四大節祝賀式典の際に全職員生徒が御真影に対する最敬礼と教育勅語の奉読が求められ、また毎日の登下校においても全職員生徒は奉安殿の前で最敬礼することが義務付けられていました。戦後、GHQの神道指令により奉安殿は廃止。各地で解体撤去が行われましたが、一部は他用途に転用されたり学校から近隣の神社境内へ移築されるなどして、現在に姿をとどめているものも存在しています。